

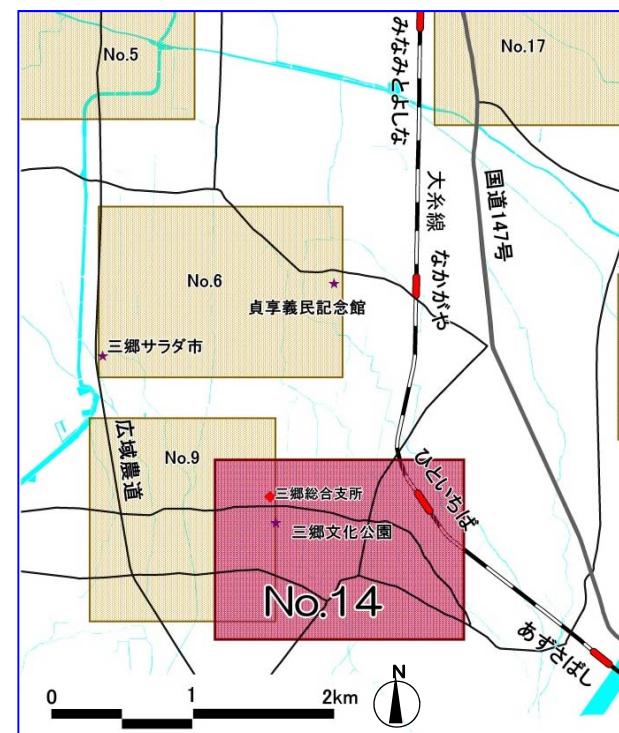
安曇野の原風景を巡る ふるさとウォッチングマップ

No.14

三郷一日市場地区

ー農村集落に発展した商業のまちー

一日市場地区はその名の通りかつては市(いち)が立ち、農村集落が点在する地域にあって中世から近世、そして近代にかけて人と物の集まる土地として発展。もとは隣接する二木村に属する一集落でしたが、市(いち)の発達に伴い人口と世帯が増え、寛文3年(1663)に一村独立した経緯を持ちます。屋敷林や古民家の見られる落ち着いた町には入り組んだ路地や水路が縦横に走り、現在は道祖神巡りをしながらまち歩きを楽しむことができます。



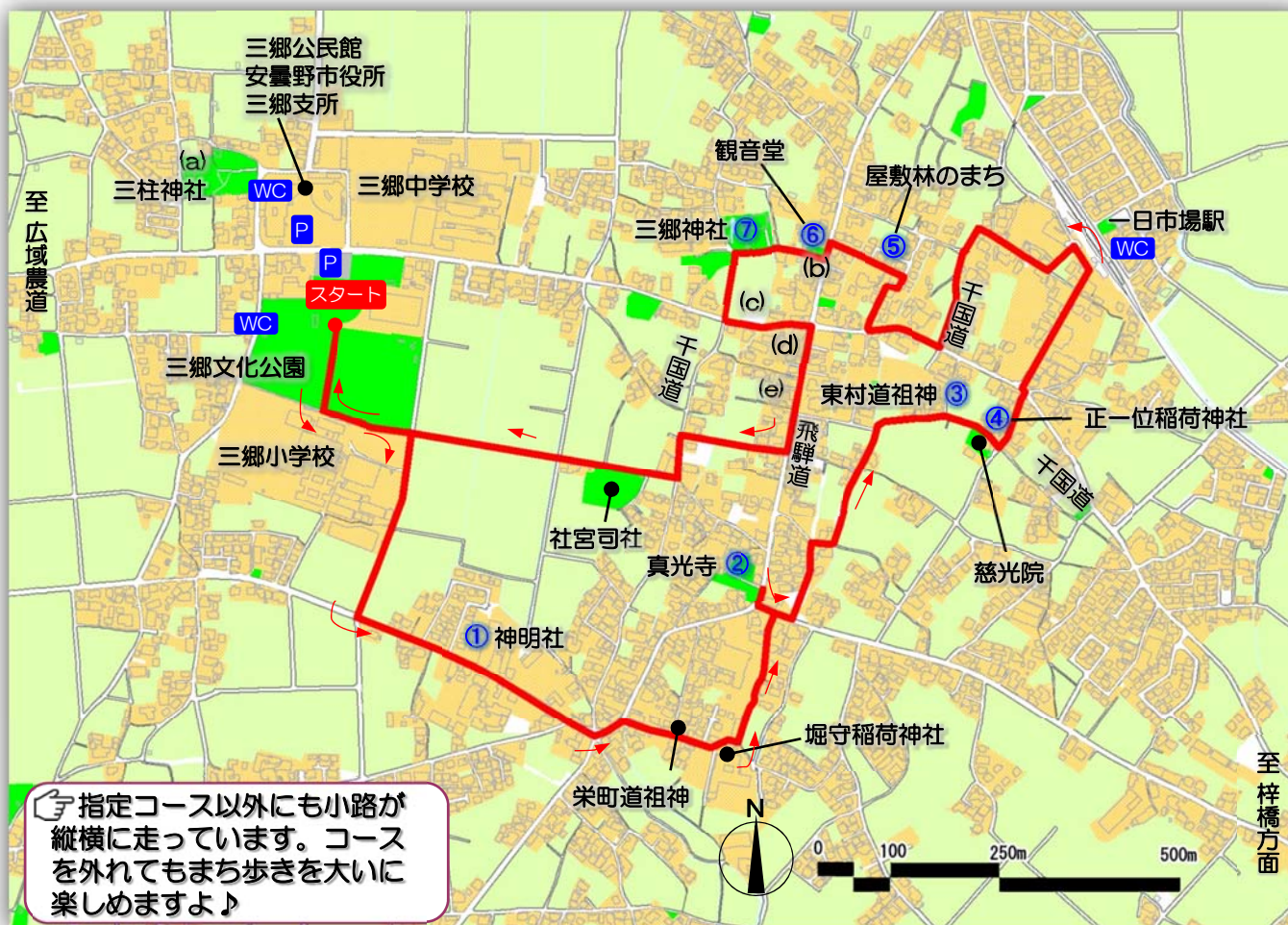
編集・発行
安曇野ふるさとづくり応援団

URL <http://azumino-furusato.com>

※本マップは公式サイトからダウンロード可能です

◆コースタイム ※時間は歩速3km/時としての目安です（休憩含まず）

スタート 三郷文化公園→約0.7km＊14分→神明社→約0.6km＊12分→真光寺→約0.5km＊10分→東村道祖神→約0.4km＊8分→一日市場駅→約0.8km＊16分→三郷神社→約1.2km＊24分→**ゴール** 三郷文化公園 【合計】約4.2km：1時間24分



※私有地への立入はご遠慮下さい。



(a) 三柱神社

一日市場の産土神／映画「神様のカルテ」ロケ地



(e) 上町(左)・西ノ木戸(右)道祖神
メインストリート(飛驒道)沿いに鎮座



(b) 飛驒道
屋敷林が続く優れた沿道の景観



(c) 火の見櫓
まちを見守り続ける地域の安全遺産



(d) 道路元標

以前明盛村役場だった場所

平成26年度 長野県地域発元気づくり支援金活用事業

① 神明社

地区の産土神である三柱神社とともに隣接の二木地区と共有する神社。明暦2年(1656)、風病が流行し死者が出た際に勧請したと伝えられていますが、新田開発の神として勧請されたものとも考えられています。境内にいる狛犬一対は慶応元年(1865)建立で、安曇野市内に現存する狛犬としては古い部類に属します。



江戸後期作ながら素朴なつくり

② 興国山真光寺

創建が明治15年(1882)の曹洞宗の寺で、前身は豊科真々部にあった住吉山真光寺。明治初年の廃仏毀釈により廃寺となり、一日市場にあった廃寺跡に再建されたのが現在の真光寺です。本堂と庫裏は明治22年(1889)建築。鐘楼門の立つ境内にはイチョウの大木が並び、秋には美しい黄葉の様子を楽しめます。



イチョウのツインタワーがシンボル

③ 東村道祖神

かつて地域の主要道路として活躍した千国道の傍ら、旧集落の入口にあたる場所に大きな大黒天像と道祖神文字碑、小さな双体像碑が建立されています。ベンガラで着色される独特の風習を持つ道祖神は、一日市場地区内の他の道祖神とともに毎年正月に御柱祭りが行われています。



大黒天もベンガラ塗り

④ 正一位稲荷神社

境内の松の太木は二代目で、初代の松は風が吹くと異様な音で唸ったらしく、安政3年(1856)の大火では、この松の発する風音によって住民が火事に気づいて素早く消火活動に従事できことから、以来「火事よけの松」と崇められていました。後年、道路拡張の為その木を伐採したところ集落内で腸チフスが流行し、「松の木の祟りだ」と囁かれたそうです。



千国道に面したお稲荷さん

⑤ 屋敷林のまち

田園風景とセットで語られることの多い屋敷林ですが、一日市場ではメインストリートをはじめとする市街地全体に屋敷林が広がっていて、さながら森のなかにある街の様相となっています。古民家と向き合う新しい住宅地でも植栽が積極的に行われ、新旧民家の不思議な街路空間が醸し出されています。



まちなかの立派な屋敷林と古民家

⑥ 観音堂

長徳年間(995～999)創建と伝わる長徳寺の一堂宇で、安政3年(1856)の大火により焼失。再建されぬまま廃寺となり、明治39年(1906)に観音堂のみ現在地に再建され、以来地元住民に守られ続けています。境内の石仏は首を切断された跡の残るものが多く、廃仏毀釈運動の激しさを物語っています。【木造聖観世音菩薩坐像他：市有形文化財】



多数の石仏、道祖神のある境内

⑦ 三郷神社

旧明盛村における明治以降の戦没者を祀る忠魂殿として明治11年(1878)に旧長徳寺跡地に建立。第二次大戦後に明盛神社と改称後、合併による三郷村誕生に伴い、昭和31年(1956)に小倉・温両村の戦没者の御霊も合祀して三郷神社と改称。現在も旧三郷村全域で管理運営されています。



境内は明治期、学校として活用されました

路地と水路

一日市場は飛騨道と呼ばれたメインストリートのほか、その東西両脇を主要道としての千国道が南北に走っていますが、市(いち)の立つ村としての性格ゆえか、そのほかにも周辺集落とを結ぶ道が放射状に何本も伸びています。それらは現在も幹線道路として活躍しているものもあれば、今では裏路地のような状態でひっそりとしている道もあり、複雑に入り組みながら町を形成しています。

また、堰(農業用水路)が幾重にも張り巡らされていて、裏路地歩きをするとそこかしこで水の流れと巡り会うことができ、町が商業地としてだけでなく、安曇野らしい農村だったことを物語っています。

